

被災地派遣レポート〈第94回〉

総務局（（一財）東京都人材支援事業団派遣） 島崎 典子さん

1. はじめに

平成24年3月31日（土）。残務整理と引継書作成を徹夜でようやく仕上げ、ばたばたした引っ越し作業で仙台に向かうも、この日は朝から大荒れな天気。東北新幹線が遅れるなど、もしま自分は、仙台市に歓迎されていないのではないか、と思っただけの散々な日でした。

予定時間を大幅に遅れてぐったりと居住地がある陸前落合駅に着きましたが、予想以上の周囲ののどかな風景にとても癒されました。

仙台駅前もですが、居住地のあたりも、震災被害の痕跡はほとんど見られません。かつ、小高い山に囲まれ、鳥がさえずり、広瀬川が流れる環境は、都会暮らしでは味わえないものだと感じました。

24年4月に東京都から仙台市役所に派遣になったのは事務職10名、土木職2名。ご家族連れだった1名以外の全員が青葉区愛子に点在する家具付きアパートに暮らし、復興支援に携わることになりました。

2. 仙台市での業務内容

私が仙台市で配属になったのは「被災者の生活再建をサポートする部署（復興事業局復興事業部生活再建支援室）」で、主な業務は、「弁護士による法律相談会の開催」でした。

震災により、思いもかけない法的な手続きが必要になったものの、何をどう処理したらいいかわからず困っている方のため、国は、「被災者は無料で弁護士による法律相談を受けられる」、という制度を作りました。仙台市はいち早くその制度を活用し、第1回目の法律相談会を24年3月に開催、私が着任した時は、その後の進め方について、試行錯誤している最中でした。

仙台市は、津波により家を失った方々（防災集団移転の対象者）の土地を買い上げるという独自支援を行っていました。

しかし、津波被害にあった方々は、先祖代々その土地に住み、農業等地域密着型の仕事で生活を支えてきた方々が多く、土地の名義変更をされていない方もおられました。

土地を売るには、今現在存命の方が土地の名義人でなくてはならないのですが、「どう手続きしたらいいかわからない」と、法的な悩みを抱えて市への売却手続きが進まない方がたくさんおられました。

私が着任中、相談会は3回行いました。今後もまだまだ法律相談会の開催は必要であると感じました。

3. 派遣中の葛藤

私が担当する職務は福祉部門や労働部門など、本来その業務を所管するのがふさわしい所属があるものの、震災により生じたイレギュラーな職務であるだけに、将来的にどこが受け持つべきか、という内内的な調整で、時間を要することもありました。

そもそも、生活再建支援とは、どこからどこまでおこなったらいいのか、その区切りが難しいと考える。行政が支援できる範囲には限界があり、基本、被災者本人がやる気を出して行動してくれなければならないと思います。しかし私の担当業務に関しては、被災された方がどのようにしたらその一歩を踏み出せるかが、なかなかクリアできない課題でした。

若い方たちは、これから先の長い自身の生涯や家族の生活のためにも、失意の中にも「やるしかない」と、活動しようとする方が多いのですが、老夫婦、一人親世帯、生活保護受給者など、社会的に弱い立場の方たちなどにはやはり、まずは心の疲れをできるだけぬぐい去り、生きるためのエネルギーを取り戻してもらわねばなりません。

そのため、24年度の後半からは、区の保健師たちと連動し、また、シルバー人材センターの職員と協力して家庭訪問をするなど、市民に寄り添った行政サービスを心がけてきました。

仙台での業務はほぼ、「東京では、やったことがない仕事」で、とまどいも多かったですが、仙台市役所の方々の優しいフォローや、思いを同じにする仲間たちとのふれあいで、どうか1年、全うできたのではないかと思うところです。

4. 町の活性化を願う

派遣期間中は、業務遂行の中、仙台市はもちろんのこと、宮城県内もいろいろと被災地を回りました。



名取市ゆりあげ地区宅地かさあげ等現地確認場

実際は何ができるわけでもないのですが、復興に奮闘している方々をわずかでも支援するため、被災地支援グッズの購入をして自身のツイッターで宣伝したり（それを見た東京在住の友達がグッズをネットで買ってくれました。）、現地のおいしい食事の画像や感想を掲載するなどもしました。



気仙沼ミサンガ

また、単発ではありますが、ボランティアでイベント開催を手伝いました。

東京に戻ってきた私に、専業主婦をしている友人から「被災地のために、一般市民の私でも、何かできることはあるのだろうか」と聞かれました。そこで私が思うのはやはり、「忘れない」ということだと思いました。

もちろん、フットワーク軽く、現地のボランティアなどに参加できれば、それに越したことはありません。現地再建のための労働力は、まだまだ必要だからです。でも実際は継続的な労働力の提供などはなかなかできません。

ならば1度でもいいから、自分の足でその地を訪れ、自分の目で復興にがんばっている人やその土地を見て、思いを共有する。そして単発のボランティアに参加したり、現地のもを購入したりし、経済を回す手伝いをする。そうしたことも、支援につながると思います。

5. 結びの言葉

被災地で働き、厳しい現状を見つめながら思ったこと。

それは自分自身が自分とその周囲を守るのだ、と、個人個人が思い、普段から準備や訓練を行うことが大事だということです。

東日本大震災は、大変悲しいできごとで、多くの人に多大な影響を与えました。しかし今生きている人間たちは、これから先のことも考えなければなりません。

普段から被害を最小限に抑える工夫をし、自分自身が生活する土壌をより豊かにし、人々や経済の流通を良くすることが、今生きる私たち全員にできる「復興支援」とも言えると思います。

特に東京都という地域で行うことは、他の地域に対しても影響力が大きいと思います。

そうした流れを円滑にする体制作りや周知徹底など、私たち自治体職員には、なすべきことがたくさんあります。

この貴重な経験を踏まえ私は、都庁人として都民の安全を守る努力をしていこう、と改めて心に誓いました。